

寛永諸家譜

清和源氏甲九冊之内
義家流之内新田流

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186 (10)
函號	特 76 1





松平目情守

豊前守

隠岐守

寛永諸家系圖傳

甲六

松平目情守豊前守隠岐守三流

家傳よ、くく昔菱家の氏族久松丸尾列

一、宰籍して智多郡よ佐と銘よ、り喜

孫久松を以て氏とす、後胤弾正左衛門尉

道定智多郡阿古辰の庄よ領と、た京進

定氏よ、とく女子有て男子な、一、是よ、

て一色義邦少輔満貞、以男論定と書、

浅草文庫

女子にあせりて家とけりしは身一久妻
法師公深又世の徳なり永録三年

東照大権現佐渡守俊勝の古居の館より渡
御の時初く松平氏と康元俊勝定勝等
りたまりて異父弟なりとてども同
姓と推せり

久松平氏とたまふ若松のく其本氏れ
部と入て沖一族の中よりまじりてとて
け三流

大権現沖母のまじりてありて種は異
なりといへども沖母姓と推せりて
とたまふことなり他家とたまふとあり
のよりやうしてふりてきつて是とてふ
乃と久松氏於定重の子孫は菅原氏れ
部とあり

道定

久松弾正左衛門尉 尾羽阿右左衛門の老と候じ

定則 まこと

新大湊門尉

道勝 ちゆうしやう

太郎兵衛尉

正勝 まこと

大膳大吏 おほのたらい

正勝のしるし佛と信と心ごういしゆ

定継 まこと

右衛門尉

定氏 まこと

右京進 ばんがいのまゐ

叡山の末寺湊列下宮勸学院の僧とまこと
きよせくく阿古石の一寺と建立一長安寺
と号して家運の法護とせり又親善地蔵
乃像と安玉とく靈法のわらたさる事と
志めは是よりいけて阿古石の庄れ人氏為今
より世にまて世宗教し

論定

二郎左衛門尉

実ハ一色左衛門少輔満貞の子なり定氏等
とて男子なき少人論定と養子と共
むとめをわらせて家督成つべし

范勝

源三清尉

氏部左補

能書の名わり

定光

左京大夫

豊前守

定益

肥前守

定益大野依治と隣ふとて此とを不和
の事ありて自裁せむとみたりと云ふ
か一事の急なりとのがんで鳥虎と

登りて豫とあり 貝と受けはすから
新屋敷在馬太史小川四郎左衛門尉とせ来て
是ととふ又新屋敷小川と事ある時に留
居よりむらりてらるるやわす新屋敷
友人定益の外男たり

定義

弥次郎

牛車

定俊

次郎左衛門尉

肥前守

後勝

弥九郎

佐渡守

いづれに長郎のち

後勝とわつたじ

祖父定益と大野佐治とつひといひて

後勝が討よむとて杉やます天守まきの

林 廣志と志らふあつひあしな

和勝とけつ 廣志と書となまつりて

よるいびとやたまふまは 廣志の作
よけて後勝の長子孫九郎定貞は佐治
むしあめめあす

廣志卿逝去の故に室家二つに後勝
嫁して康元勝後定勝といふはつら
是

大権現の沙女堂なる

永祿三年三月

大権現九年十九日して大宮の城としく
とて智多郡に渡河し給ふとて石居

此館に入し給ふ時、母あひびに継父
後勝は沙女とて一あひびありひん
いよるいびたまふ同母の才三郎太郎源
長後二人沙女の名は

大権現是より貴也し給ひて我は才すか
今より後よりしく同姓の兄才三郎
少へて仍て松平氏とたまふ又給ひ給ひ
冬川平均の時に松平氏に創業のたし
けとせん 母のいよく中よりついで福

いふことありまして後継の中よりおまゝに
ゆり事世の幸ふふりぬりしに後勝一
献とてすまつり長刀螺貝支種カサガキの奇物とて
もと又うごけあつて平時久延竹田久六が
と為こせ給ひてりまゝに四切のりよのべた
ます是より先

大権現惣大田那古をいふ座の対阿古居より一
日海の程とつ子に往還して沙安否とてい
なり夜敷薬者と送致とては友人といふ

て使とす駿府沙座の対と又松り是よ
けてとけ沙鯉祠あり

大権現東冬河に沙を教後勝を軍隊あり
ひり新屋の勢と引ぬく先陣とす人下
山中醫王山に取出とせしむ時後勝先づけ
とたお款吾城の海のとより後勝
が澄の肩裏とけく後勝とけとより打て
是よりいさげて下知しけり城すてふ
まぬらと出然ふけりてとて是より

城よりすしらおひ

同六年服部氏の謀策によりて鶴屋某

より新町の西郡の城とせめ落し討り

西郡の城と後勝はたまをいごとと後勝をよ

畠崎の城よりわけて清田をい敬言国大

新少へも子之郎左郎よりあ郡の城は領せ

し又尾川に古居の庄は長子定負

是と領し定負は後勝のつと服れ子なる

尾川の同族と成く依久も古清の討と同

く大坂天主寺の陣よりあり其法新屋の

城主名野下持守飛騨國よりび濃州

岩室の城より内通ありい淡玄より信玄

乃命よりいして生害せりあ討定負と嫁生

よお

康元

相平之郎左郎 目播守

後み信下

大権現同母の弟なり

永祿三年

大権現の仰よりして久松とわらためて松平
の称号よりしむるに及ばしよりして金田
教員より本小左衛門坂部孫内平将承角吉田
久吉清吉と康元と承せしに
元龜三年三方原合戦の時康元十六歳
あり軍切あり家臣金田教員討死あり
士卒死しきすはくよめたり
天正年中尾川康元部の城とせしは討

康元 御命よりして長次郎とありて
向とて向と郎と清國尉法政の権助とありて
くつひて日わらずしてせめおとる

大権現康元、我場よりしむるに及ばしよりして
と感したまひて下総國実宿より二万石

城たまふ

同十九年奥州九部陣の時康元共士百
八十名歩卒一千餘人と引わく下野國
小山よりしむる

大指現之軍兵の多勢なるを以て見たまひて
 涉感^{かきん}を以て康元^{かみもと}あまのびよ^{あまのびよ}本多^{ほんた}平八郎^{へいはちろう}志勝^{ししょう}
 丹^に伊^い三^{さん}郎^{ろう}少^{しょう}輔^ふ直^{ちく}政^{せい}おと^とり
 大指現の先陣^{せんじん}と列^{りゆう}と涉攻陣^{せうこうじん}の後^{のち}尾^び宿^{しゆく}乃^の
 隣^{りん}郷^{きやう}よおのく二万石の涉加増^{せかぞう}となり
 てお合^あ四^よ万^{まん}石^{いし}と願^{ねが}し
 安^{やす}長^{なが}又^{また}年^{ねん}岡^{おか}原^{はら}涉^せ陣^{じん}の内^{うち}康^{かみ}元^{もと}江^え戸^と涉^せ
 城^{じやう}の西^{にし}とけしむり
 同八年八月十四日卒し六十二歳

樂^ら傳^{でん}宗^{そう}英^{えい}と号^{ごう}し

女子

豊^{とよ}初^{はつ}内^{うち}膳^{ぜん}長^{なが}盛^{せい}妻^{めかけ}

女子

友^{とも}浪^{なみ}新^{しん}八^{はち}郎^{ろう}妻^{めかけ}

忠^{ちゆう}良^{りやう}

甲^か斐^ひ守^{しゅ} 浪^{なみ}又^{また}佐^さ下^げ

安^{やす}長^{なが}又^{また}年^{ねん}岡^{おか}原^{はら}涉^せ陣^{じん}の内^{うち}涉^せ旗^{はた}本^{もと}

下迎符

同八年家督とけく

同十九年の冬大坂陣の時志良は

名和元春大坂再戦の時志良は

切く首級と家人ありひ討死

ありひ底とけり母は志良軍切

ありよして園宿とわらためて

大坂よりりて一万石の御加藩とたまは

又仰よしく他日自給食也と母より

女子

たまは志良 御命のけりけりきこと成
清て御命を石と領む
寛永元年六月十八日卒と
江安宗政と号す

女子

大坂陣出陣志良の妻 松平式部大輔
志次母

大権現の湯養女 福海刑部

女子

大権現の湯衣良女軍統後守が妻

女子

台徳院殿の湯衣良女中村一孝の妻

忠利

采女正

下総國実宿よ生ふ

元和九年湯入浴の時濃列大垣よそ

台徳院殿より湯衣良女の湯衣良女とたふ

寛永元年又忠良死すの対中憲良為妻

の子たふよよひて

台徳院殿の物命よよひり家督つ

ギ大垣より佐列小徳ようつると忠利

み千石より給りてとどめ

將軍家次孫よよひる

同六年江戸あ九石恒湯普徳の役よつ

とむ

同十一年

將軍家涉入洛の時、宇治守士見の涉門
毒とつとむ

同十二年、宇治守の涉、普徳とつとむ
同十六年、又宇治守の九石垣の涉、普徳とつとむ
水とむ

女子

右徳院殿の涉、普徳女、黒田右衛門、依忠之

室

女子

榊平出羽守直政の室

女子

佐々木右衛門の妻

憲良

五郎 目播守 後み佐下

母、酒井左衛門尉のしとめ

寛永九年、家督成けく

同年の秋、濃河大垣とあり、たぬは、小治

一ノノノ

勝後

源二郎

幼年よりして

大権現と諱してたてまつり相率成とたまひ給

十二歳の時作よみりて人質よりして

甲別より居候事よ六年の故

大権現の奇謀よよみりてひさふ甲別とのれ

よ終このよと湯感わりて一文字の御腰

物當麻の湯服指とたまひ給

天正十一年正月駿河久能丸城と勝後より

たまひりて作けふ勝後りよ時よ忠勅

おたふ事か其功先事よるより

同十四年四月二日病死 法名澄清

勝政

豊前守

浪人伝下

実にお母者清太郎の子なり勝後とはやふ

つゝ嗣^{つぎ}とす^{つぎ}右次郎^{みぎじらう}を勝後^{かちご}が介^{まが}勇^{ゆう}なり
ふの^{ふの}系^{けい}圖^ず其^{その}氏^{うぢ}族^{しゆく}よりこ^{この}氏^{うぢ}型^{がた}を
少^{すく}く^くよ^よ畧^{りやく}と

文^{ぶん}福^{ふく}元^{げん}年^{ねん}二^に月^{げつ}

大^{だい}指^{さし}規^ぎの^の作^{さく}よ^よりて^{りて}米^{まい}比^ひ千^{せん}石^{せき}と^と百^{ひゃく}石^{せき}と^と領^{りやう}と

同^{どう}年^{ねん}胡^こ鮮^{せん}陣^{ぢん}よ^よりて^{りて}志^しと^とふ^ふひ^ひを^をりて^{りて}肥^い河^{がわ}

名^な護^ごを^をよ^よりて

安^{あん}長^{ちやう}六^{ろく}年^{ねん}国^{くに}原^{はら}陣^{ぢん}の^の侍^{しやく}奉^{ほう}と^とつと^とむ

同^{どう}七^{しち}年^{ねん}十^{じゅう}月^{げつ}米^{まい}比^ひ千^{せん}石^{せき}と^と百^{ひゃく}石^{せき}と^と領^{りやう}と

同^{どう}八^{はち}年^{ねん}三^{さん}月^{げつ}米^{まい}比^ひ千^{せん}石^{せき}と^と百^{ひゃく}石^{せき}と^と領^{りやう}と
叙^{ぎよ}一^{いつ}等^{とう}前^{ぜん}身^{しん}
但^たし
大^{だい}坂^{さか}両^{りやう}度^どの^の侍^{しやく}陣^{ぢん}よ^よりて^{りて}侍^{しやく}奉^{ほう}

元^{げん}和^わ二^に年^{ねん}八^{はち}月^{げつ}

右^{みぎ}德^{とく}院^{いん}殿^{でん}米^{まい}比^ひ千^{せん}石^{せき}と^と百^{ひゃく}石^{せき}と^と領^{りやう}と

同^{どう}六^{ろく}年^{ねん}八^{はち}月^{げつ} 命^{めい}よ^よりて^{りて}大^{だい}坂^{さか}の^の城^{じやう}

番^{ばん}と^とつと^とむ

寛^{かん}永^{えい}九^く年^{ねん}十^{じゅう}一^{いつ}月^{げつ}駿^{すま}河^{がわ}の^の沖^{おほ}津^つ城^{じやう}よ^よりて^{りて}番^{ばん}

と^と翌^{あした}年^{ねん}米^{まい}比^ひ千^{せん}石^{せき}と^と百^{ひゃく}石^{せき}と^と領^{りやう}と

勝義 かつぎ

二千石の湯加増をたまわけて於合八子
石と領もそと大津藩に攻め成る馬と
十人あ卒み十人を斬る
同十一年六月十日卒と
道羅休室と号と
松月院

源二郎

豊前守

後み佐下

寛永九年十二月恒人佐下と叙し

女子

豊前守と任し

同十一年十一月又勝政が妻とたまふ

宮城之藤豊嗣の妻

勝則 かつのり

源二郎

寛永十一年津と海還津の時八月駿府
乃湯城とあわく

將軍家ノ許シ申出升大炊頭おほいけ相平あいら伊豆守いずのみ

奏あや老らより討小勝則おのり十二じふに年とし

勝志かつし

兵部ひょうぶ

寛永十二年かんえいじふにねん駿府すまのふにおわく先勝則あきかつのみと同おな

討う

將軍家ノ許シ申出討う十二じふに年とし

定勝じやうかつ

幼名長後おきなながのち

三郎さんらう四郎しやうらう

隠岐守おきののみ

天正十年てんしやうじゆんねん信長のぶなが逝去せきこの時とき豊臣秀吉とよとみひでよしの智謀ちぼう
から河か柴田勝家しばたかつとみの威い内うち威いよりより成なり
らたらいいげげくく

大権現おほいけんげんとままりりとと志しくく志しくく親族おんぞく

ややふふんん事じ成なりああららけけしし子ことと遠とほ別わか候さし書まがよよ

建たしし討う家いへ臣しんおおねねかかりりてて定勝じやうかつとと討ういいささるる

へへキキののりりふふららすすでではは出い立だええ事じとともも

よよかかしし討う女め云いののいいくく先源あきげん三郎さんらう甲か別わかとと

質ちととてて乱みだとといいけけててののれれゆゆふふ討う山やま中なか

吾ぬく〜して是の指代おとえんと我是と
おろよ悲歎あましりわり志のいふこと

大指現常は証代のため他國にまはばと討ハ

我三郎四郎とて力とす是とけりする

あふ〜とてやかく辨〜たまふこと

とかりことけり〜やじ是よ〜して定勝

志づ〜く涉不枝と〜りや〜とも後つあよ

息顧とかがゆふ

孝長六年遠川無川の城とたまひて

之万乙領と

同年没又信下と叙〜隠岐守小伝と

同十年

大指現京師より還河の海兵無川の城〜

渡河の時定勝は作を〜海男子おり

おの〜とて小成人なり國家のまひり也

なり〜とて為津陸奥守家久我と親族は

事〜とて瑞男河内守定行と婚姻とし

お〜とて又遠飛陣正少將長政も縁若

たしんよ成のそむ越中守定綱と婿^{えん}
はごじ^ご色^し一^ま

同十二年

徳院殿の命よよひて伏見の城代よ補せ
まよ万石の地よたまふ無川の領地三万石
は定綱よたまふ定勝よふくら^{くら}深人^{ふか}と後
して駿府よつり

徳院殿の命よのふ時よ

大権現乃作よ伏見はら下の要地たり^{要地}津^つ

とをろぐ一やい^いととおかめ^めとしひあ
よひて南比^{みな}津府^つよりいさ^い給^{たま}はな
伏見敬云^{ふし}清^{せい}のため^{ため}播代^は勇切^{ゆう}の^の正^{せい}教^{きょう}軍^{ぐん}よりを
よ^よ具^ぐ無^む根^{こん}と^とた^たく^くつ^つま^まし^しふ^ふ一^いか^かなり
と^と事^じの^のあ^あり^りま^まか^から^らか^かく^く城^{じょう}と^と海^{かい}
り^りて^てお^おこ^こる^るふ^ふれ^れ又^{また}無^む川^{がわ}津^つ体^{たい}是^{これ}
こ^ころ^ろふ^ふら^ら河^か内^{うち}守^しな^なび^び一^い家^けれ
妻^{さい}子^しよ^よを^をせ^せ給^{たま}ふ^ふ
同十二年

大権現沙入洛の内定勝領地とありたため伏見
の迎意まへげ少々すくすく材木柴薪まき使たりありあふあふ二万
石江別志賀高橋二郡の地ちとして自由の地
四万石又またううめて新地へうつすの内うちくく
のため少すく城米二万石とたまふ事ことのあはれ
ときときは七年の技師わざしううくまのじじなり

元和三年

名徳院の作つくりしめて甥別せいのべ兼かね名なれ城しろより
うつり十一万石領りやうむ

同六年長崎乃城ながさきのしろとくつたまふ

同九年八月

名徳院殿の御命ごのみことよよしめて戻もどり位下ゐげに叙ぎよし
少将すしょうに任たむ

寛永元年三月十四日兼かね名なよよて病死びやうし
六十八歳 法名ほふな圓徹ゑんてつ 山やま宗源寺そうげんじと号なづし

寛友かんゆう

遠江守えんげのまもり

早世はやせい

定行

河内守 隠岐守

長六年

大権現沙野野のため小関東沙下向還治の
治治無川の城は渡津のととき定行十又
栄りてとらめて評しとまらる作は
いしく汝やを成人と来年 母公
御方京部の神社佛国は猶せんとのた
まふらんちまは是よりとらひてら海

伏見より来く迎習れまよつとむる一と

同七年 御方沙と海の時定行是より
とらひて伏見よりとらひてすからとらと

め強ひて伏見より作し

同年は又位下し叙し河内守より位下れ
て官位料とたまふ

同八年馬のひ料として河内蒲生郡よ
て日野高野の二郷とたまふ

同十年伏見よりおわくとら我れと信る名親

か 旧宅とたまふし年

大権現の命よよひて 河津陸奥守家久がじ

めよめとら 仰よいしく 河津八雲世の大家

ならはごめて 婚礼の儀式おもしろく 是よ

よひて 一位局あまびよ 官女十餘輩よ

仰よ 婚礼の儀式とら おこふりし 又村藏

女目下 於 古者 湯厨よ 仰よ 婚礼の儀

事よそのしし

同年

右徳院殿 征夷大將軍よ 仰よ 是れ 冷ふ時

大権現 河系 河定 河治 馬よ 奉と

同十二年 父 定勝 伏見の 城代よ 福とら

るしき 仰よ 仰よ 魚川の 城と 定河よ

たまひて 三万石と 願と

同年

大権現の命よよひて 仰よ 是れ

右徳院殿よ 仰よ 仰よ 河前へりて

御食よ たまひて 仰よ 仰よ 仰よ 仰よ

上清堂とて後より御腰地なまびり清
ふ代洋領も同年此冬

大権現遠に五中泉と清野次清川

乃城と清川の村銀子綿糸代洋領も定行

と又清腰物と故と是より後清野飛

ありとに教度無川と清法の時洋領

進物いふのおと

在清院敷清入法打とひり四京清将の時度

無川と清法毎度海子清腰清腰地清法

定行と毎度清腰物と故と

同十九年大坂陣の時先陣とてさきの

御命とかり御旗本の勢より十餘日

ひふり伏見とつり又定勝の勢よりつり

伏見ありびり清の城と警備してまね大坂

とつり恒春と陣とつり

元和元年大坂再乱の時御命よりつり

又定勝の京於二条の城と敬言清と定行ハ

伏見の城とつり

同三年

台徳院殿沙ら活の時休奉又定勝と伏見乃
涉城へありて惣別素名の城とたまり
十一万石と領し定約家督たふよつて
定勝と同ぐく素名よつたむきのむ
作よひて素名よひきて任居し
同六年女洲入内の時定約跨馬よつて休奉と
同九年

將軍家沙ら活の時素名よひきて任居し

寛永元年又定勝奉去定約作よひ
て家督とけく

同三年沙ら活の時素名の城より涉洲
の時浪子洲股よたま定約と又洲股
相綿よ結してすつら休奉よつて京教
しつた

台徳院殿の命よよひて後四位下と叙し
隠岐守とわつたむ号よつて此度二条の城よ
り奉

將軍家以じひして涉糸川の時涉馬とて
伊勢守と

同十一年涉糸川の時二条の城乃軋方れ田
中より百石四方の地とたまりり候屋とた
てて城外の警備となす時

將軍家へ命よりりて竹垣に任きりて還御
の時兼名の城に渡り御領進例の
同十二年兼名とありたりて豫州松山城
とたまりり十石御領と

定綱 い子

かこみな 小名三郎四郎 あちのつし 越中守

いさしちか 孝文長元年定綱之男とありりて荒川
氏の養子となりてりて兼名

同四年荒川次郎九郎伏見の城出番の
内より病死荒川の一族定綱といふ者督
とせんといりてとすよ達とて

御大方と涉対候の次で定綱といふは
大権現治事候定綱の子とて何れ他人

遣使とのうまんとや成人の故別は領地と
あつた為一と

同六年又定勝遠別魚川の城とたまふ
翌年十月中旬

大権現園東沙下向の海に魚河の城

渡沙の時定綱とて移湯一を致

すかつら 沙前へつてそ年敷とこハ

せ給ふ十一衆のよこつてやと 仰よ

いづくか年れくを奇たりし

おし

龜院殿にけり 上意とくら

龜一とて是よしめて十一月江戸にお

ひんとせし時父母乃いづくを風は

かきし 朱喜と給へ 制と定綱初

といひもかたけなき 上意とくら ぬ

ふ何ぐまをよとまんとすかつら江戸

よつたててなま依渡と正徳とく

上岡と達一あ九と何作して一位局と

たのこ

大権現^大の福^福一甘^甘りけき^{けき}にま^ますみ^{すみ}や^やり^り
来^来ふ事^事と感^感じたま^{たま}ひて^{ひて}ま^まら^らな^な丸^丸
いり来^来ふ^ふの^のあ^あやと^と涉^涉為^為あり^りし^しと^とき^き
喜^喜じて^て七^七清^清門^門烟^烟作^作の^のよ^よき^きあ^あり^りし^しと^とき^き
か^から^ら喜^喜じ^じし^し命^命ぞ^ぞう^うま^まげ^げり^り隠^隠波^波守^守り^り
之^之男^男

台徳院^台殿^殿の^のは^はく^くへ^へり^りて^て我^我考^考子^子と^とし^しへ^へ
そ^そを^を考^考じ^じし^しの^のり^りて^てや^やは^はく^くる^るを^をし^しと^とて^て回^回朋^朋

善^善阿^阿鉢^鉢と^と七^七大^大唐^唐の^のよ^よう^うに^に流^流へ^へし^しか^から^らり^りし^しし^し
本^本丸^丸の^のり^りて^て大^大久^久保^保相^相摸^摸守^守忠^忠隣^隣奏^奏者^者
り^りて

台徳院^台殿^殿の^の福^福一^一と^とま^まり^りし^しと^とき^き

同九年正月

大権現^大の福^福一^一甘^甘り^りけ^けき^きに^にま^ます^すみ^みや^やり^り
仰^仰ま^まる^るの^の三^三郎^郎四^四郎^郎の^のお^おり^りの^のま^まり^りし^しと^とき^き
り^りて

台徳院^台殿^殿の^のは^はく^くへ^へり^りて^て我^我考^考子^子と^とし^しへ^へ

先小地とたまふて下総國山川
の内少くも千石と領じ

同十年二月

右徳院殿涉と后將軍宣下の時定綱伏見
少くはみ位下と叙一越中守と任せり

同年十二月

大権現の命よりして淺野彈正少弼長政
むしめとせり

同十四年下総國山川の地をたまふり二

又重忠と領じ

同十六年相別小田原城とてつと定綱
一組のりらとたり

同十七年江戸涉城の地形普請乃時
十組の人数とつく是とつと定綱一組の

頭とたり

同十九年大坂陣の時 仰よりして組頭

とたりて涉旗本暇遊の士三千餘輩
ひの家臣郎従数百と引ぬく侍を

元禄元年大坂五乱の時と又継中の士
年と引わく教向も此時黄金銀子と
あまゝね領も六月七日早旦決戦ことと
大坂表より東へ出よる南ハ
大坂壇より引いて軍機充満をなす旗
本より引いて 命とけがら定細継
中の士年よりいひきれハ清旗のむす
とるく大坂清先よりすんで人教と
よきて推へり馬鉄炮よりこふてた

右の勢よりすまごころす一列は並居て
清下知とゆへりといひて使一人とつ
りてたよりありし又士年ふきり
けふ先陣の多りくすんくすからる
前の大坂と推へり赤塚のあれさ
思ひきてしみやふすみりし
くはしひとなせり教へしと午の刻
より引いて天守より引く勢より急
あはよ引いて継中の士年よりあり

て件くだんの道みちと爲なりて人殺おとこころとおとよしとし
とさし事ことあくしてすまやふ城下じやうよ
り家定いえさだ細敵こさい告つるわらん事ことと勢いきり一
て城しろ中ちゆうよ入敷いりしき火ひ乃な中ちゆうよいせめらひて
一ひと士しよあふ様やうよく是これとつめてすまつら
ま首くび城しろと終つひま時城ときじやう中ちゆうより火ひとよま
ひて款くわん無な級けい水みづの神かみとよくくやくけ
ひのよ言ことばよしと其その次ついででよつて皮かわ首くび城しろ
け使つかよけあく敵てんとよ度たび又一また士し城しろ討うち

こ家定いえさだ中ちゆうの古ふる年としも又城しろ中ちゆうへせめ入いくお
ろく勇力ゆうりき城しろあつひて首くび十六じゅうろくとよ終つひ
定さだ絶たつが帛うす浪なみと首くび二十七にじゅうしちと持もつり同どう言ごん
の喉のど界かやまよりおのく首くび突つ突つ換かへの時とき定さだ細こさい
が城しろ中ちゆうあつひよ家いえ人ひと軍ぐん切きとよひまこと
乃なしひ物もの命いのちとつめ物もの終つひ同日どうじつの夜よ
城しろ中ちゆうよくく梅うめりくよ秀ひで頼たのあつひよ
母はは去さ茂しげの内うちよ終つひ辰しんとつめ定さだ絶たつの四よ人の
絶たつ頭かぶ物もの命いのちとつめつりて八や日にちの早はや且かつ

より橋門極楽橋と警清と討つる内
より火とんちりて秀頼さるびよ母妹
してはわふ族滅と定綱等六月十六日
よつと終りて警清のためは地あり
同二年下総國川内下津原の庄三万石
とたまふ

同四年遠別無川の城とたまふ
佐渡原の庄曾我の庄成領と

同六年涉入洛の侍有還御の洛河

の城は涉入洛の侍勝持さるびより銀子
御殿とたまふ定綱も又涉入洛と討つ
同九年涉入洛の侍有無川の城と涉
一宿の時御領をゆゑあはれと

同年京都におおく定綱も命とて
仰せ給ひ伏見の城すてよつと終り
京都警清の地没の城とさるはたより
女古城とわらたまふたふ城と築て警
清すしとて是よりよつと終り

綿木と進献と八月中旬より九月中旬
ふつと終りて 沖産成をりせ終り九月
下旬遷居の時銀子二百貫目とたまふ
定縄台が成送りせり江列あり
しと終りて下けなき 御命とあり
て清ら成非領と

同十年濃の城とありため濃列大垣乃
城とたまりて六万石と領と

同十一年清入濃の城次大垣の城と濃列

の時又文字乃此服指ありびと銀子五百貫
成清領と定縄と清腰物ありびと綿
と終りて此時先年乃濃あり領地と換と
終りて 上同と達と是よりありて金
卒支と終りて定縄成とつとあり
入濃と二条清城ひつとさふのあり田中
ありありと百石あり地とたまりて
順屋とたて城外の敬雲清となり
同年後田中下と叙せり終

台徳院殿の命よりして浸み停下る叙

一 義徳守より任じ

同九年涉入洛の儀を

寛永二年長門乃城とたまひて七

千石と領じ

同三年涉入洛二条の城一 幼尊

の内定房 中宮幼尊の儀をよつと

む

同四年浩ありて領地と損じ給り旨

台種より達して檢使と下されて銀
二百貫目とたまふ

同七年大坂涉城の涉番とつとむ

同十一年涉入洛の儀を

同年浩あり又領地と損じ給の儀

上同より達しけきすすかから奉新の

儀を下用し給ひて境とさぐりて

とて其料也とたまふ

同十二年豫州今洛の城とたまひ

て三万石と願む

同十七年生為守之願濱濱一國

と波收せしむ時定房等 均命とか

ううりて濱別高松の城よむ番と

つとむ

万石

長松

定改

能登守

元和六年江戸より引てそめて

右徳院殿より賜へ奉給

寛永三年よりして系勅とてなす

川江戸より同修と

同十年二月 均命より引てはてす

まの敷

同年十二月頃六位下より叙へ能登守

又任む

同十一年二月勢別之重政よそ六千石の
地残たまふ

同年六月 河合よよひて湯小姓組の
頭となり給

同年湯入流の侍を

同十二年と為の城よたまり給て七子
石と領む

同年流の領地と換む

女子

同十二年境よころく料物よして銀五三
百貫目よたまり給

女子

服部石見守の妻

女子

松平玄仙守忠義の妻

中川内膳正久盛の妻

女子

酒井阿波守忠行さかいあいのむねたけの妻め

女子

阿部對馬守重次あべのつしまのむねしげの妻め

女子

松平佐後守まつだいらさごのむねもりの妻め

定次さだつぐ

豊後守ぶんごのむねもり

早世はやせい

豊松とよまつ

寛永十八年八月くわんえいじゅうはちがつにに

將軍家と縁ゆかりししてまりしるる

女子

女子

定頼さだより

刑部左輔せいぶさのたすけ

河内守かわちのむねもり

元和三年

右徳院殿 沙入洛の洛次魚川の城に後御
内定頼十一歳より始て孫頼となりて
沙入洛と稱領也

同九年 沙入洛の洛次桑名の城に後御
の時

右徳院殿

將軍家と稱一となりて沙入洛と稱
領也

寛永二年よりめて寛永よりして

右徳院殿

將軍家と稱一なり

寛永三年 沙入洛の傳也

右徳院殿の命よりして後又位下は叙せ

ふ時小 作とがよりて又定行名と臨後

守とありしは時定頼も河内守とありた

し二条の城より 幼少の時

將軍家よりして沙入内定頼よりして

庵いん後ご

女子

酒井さかい後ご守もり右みぎ朝あさが妻つま

千せん松まつ

虎こ千せん代だい

女子

女子

女子

家紋いえもん梅うめ瑞みづ月づき





